家づくりの本 | 別冊 |

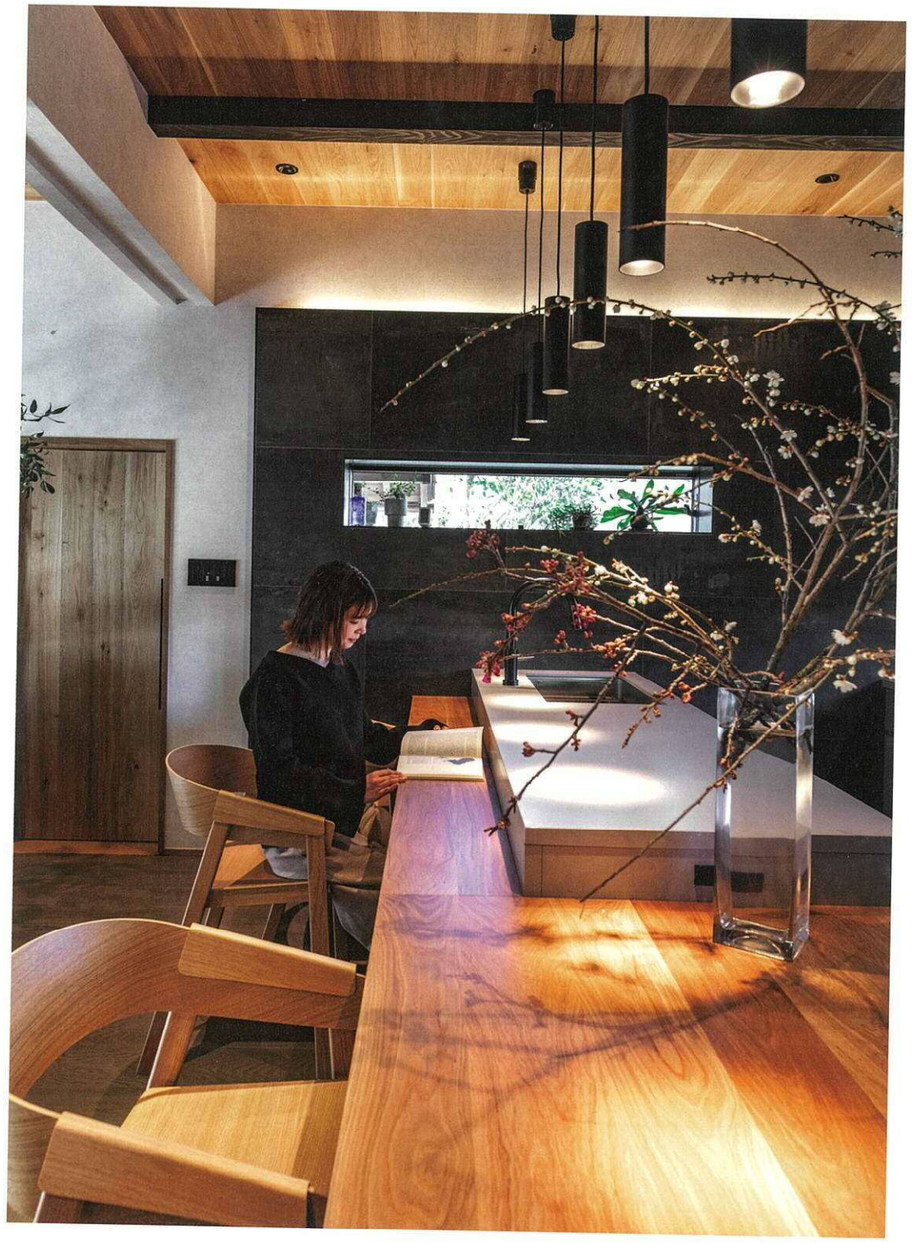
フクオカリノベ

FUKUOKA RENOVA

福岡で叶える理想のリノベーション

2021 no.06

Renovation & Interior Life Style Book



すてきなリノベのお宅訪問

戸建 マンション

リノベの達人

The professional Renovation Works

すてきなリノベの展示場へ行ってみよう!!

価格帯別実例集

インテリア・家具・雑貨

SHOP GUIDE

Fukuoka mook

HOTEL CULTIA
太宰府
でリノベを“体感”する

古民家ホテルから学ぶ“建築を受け継ぐ”ということ

江戸時代に建てられた絵師の邸宅「古香庵」をリノベーションした『HOTEL CULTIA 太宰府』。
実際に、暮らすように泊まりながら、古民家ならではの良さや美しさを体感した福岡リノベ業界の巨匠・松山真介氏がチーフの福田正一郎さんを訪ね、古民家再生に対する思いや取り組みについてうかがった。

株式会社アポロ計画
リノベエステイト
松山 真介
Shinsuke Matsuyama

Profile
一級建築士・宅地建物取引士として活動しながら、2000年にクリエイティブカンパニー「アポロ計画」を設立。現在は、同社の中に立ち上げた中古建築の再生事業部「リノベエステイト」の代表も兼任。一般社団法人リノベーション協議会九州部会会長も務める。

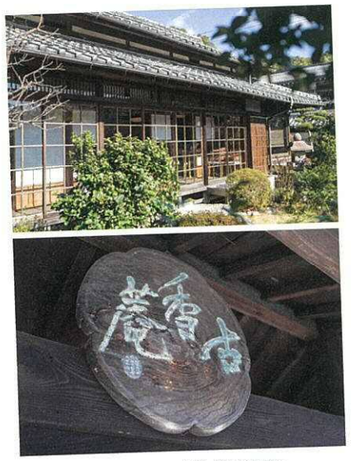
HOTEL CULTIA 太宰府
チーフ
福田 正一郎
Shoichiro Fukuda

Profile
2015年9月　バリューマネジメント株式会社入社。京都・美山出身。小学校は剣道、中学時代はサッカー、高校は卓球部。美山と八ッ橋をこよなく愛する男。明るく、エネルギッシュで頭よりも体が先に動くタイプの人間です。

窓から除く景色がゆらゆらと波打つように見える「大正ガラス」や、ちょうど目線の高さから景色が見える「雪見障子」など、昔ながらの姿が残されたレストラン。シンプルな現代の家具や照明が調和している

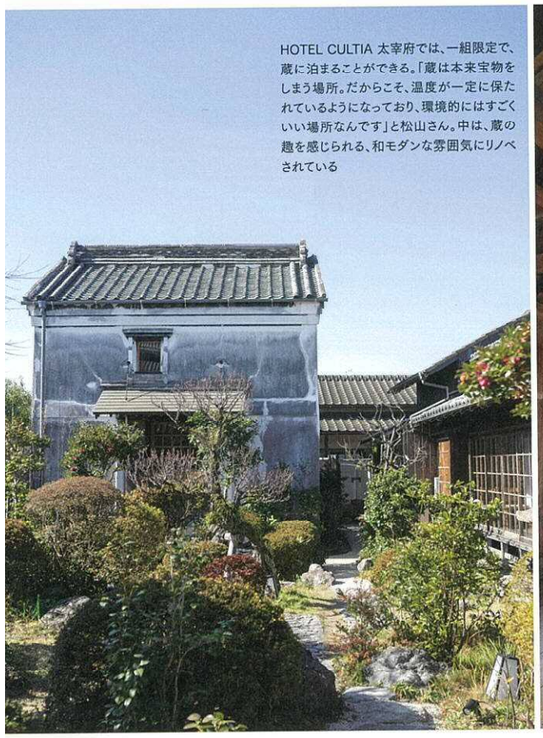
丁寧な暮らしを感じながら日本人らしい心の洗濯を

「いつか絶対に取材してみたかったんだ」。マイクロツーリズムが注目を集めている今、プライベートで『HOTEL CULTIA 太宰府』を訪れたという松山真介氏はいう。古民家ならではの良さをそのまま残したその姿に感動したのだとか。出迎えてくれたのは、チーフの福田正一郎氏。「弊社（バリューマネジメント株式会社）は日本各地で数々の分散型古民家ホテルを手がけているのですが、一貫して、〝オーナー様の思いに寄り添う〟ことを大切にしています。歴史的建造物を後世に残していくことが第一。最低限の修繕しか行なっていないんです」。場所によっては隙間風や床の軋みなどが感じられるが、それも「日本人の丁寧な暮らしぶりがここに現れている」と松山氏はいう。例えば、床の軋み。これは、かつての住人だった絵師・吉嗣梅仙が、静寂の中に響くこの〝軋み音〟をも楽しみたいという思いから、このような設計にしているのだとか。「ここにくると日本人として魂からリセットされるような感覚になる」と松山氏がいうのもうなずける。

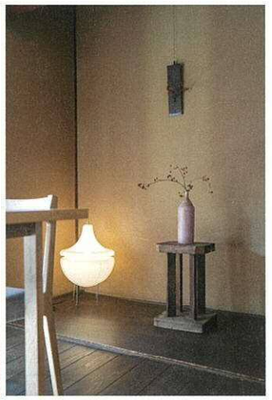


[上]そのままの姿を残している外観。庭には井戸も。
[下]入り口には、明治時代に取り付けられた「古香庵」の看板

[左]昔からその場所に存在していたかのように感じさせる床。経年変化しやすい素材を使用することで、古民家とマッチさせた。[右]ほとんど手をつけていないという長い廊下



HOTEL CULTIA 太宰府では、一組限定で、蔵に泊まることができる。「蔵は本来宝物をしまう場所。だからこそ、温度が一定に保たれているようになっており、環境的にはすごくいい場所なんです」と松山さん。中は、蔵の趣を感じられる、和モダンな雰囲気にリノベされている



ホテル内では常に〝非日常〟を味わえるよう、さりげなく置かれている装飾品や、家電製品にもこだわっている。エアコンは白だと目立ってしまうので、黒をセレクト。九州の作家さんを中心に揃えた装飾品も、古民家にスッと馴染んでいる。「お客様に〝博物館みたいですね〟といわれます」と福田さん

「建物を私物化しない」未来のリノベーション

暮らすように泊まるということを、ひとつのコンセプトとして掲げているHOTEL CULTIA 太宰府。太宰府の街全体をホテルとして見立て、敢えてホテル内には土産物売り場や、コンビニのような売店を設けていない。「九州のブランド食材を中心に使った朝食や夕食を楽しんだ後は、ぜひ、外に出かけていただいて、お買い物や大宰府の食を楽しんでいただければと思っています」と福田氏。実際に滞在したという松山氏も、街に出て太宰府ならではの夜を楽しんだのだという。「建物を私物化せず、街を私物化する。そうすることで、逆に街からも開いてもらえているんだと思います。江戸時代から活躍していた絵師が丁寧に暮らした形跡が残るこの邸宅を、ぜひみなさんに体感してもらいたい、心からそう思います。テレビや時計、明るい照明がない、この演出も本当に素晴らしいですよね。非日常を味わえました」と松山氏。建物を私物化しないということ――これは今後の古民家リノベーションのひとつのキーワードになるのかもしれない。

敢えて〝残す〟ことの美しさ。かつての住人に思いを馳せながら、体感する

[左]小屋を取り壊して増築されたと思われる形跡。「大工さんが壁をはがしたら、こんな形跡が現れました。面白いので、敢えてそのまま残そうということになりました」と福田さん。「土壁の風合いが、まるで過去の職人と対話しているよう」と松山さん。[右上]もともと畳の下の土台として使われていたという数字がかかれた板は、壁に貼り付けて活用されている。[右下]一部塗り替えられた塗り壁。手を加えた場所がほとんどわからない

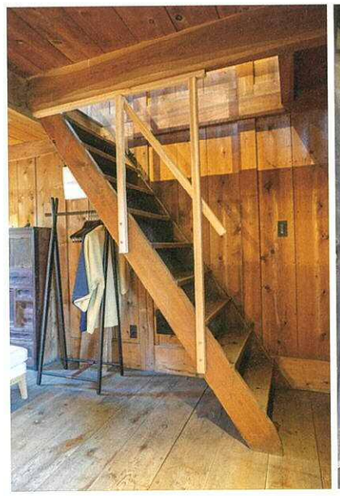
リノベーションで人生をより充実したものに

リノベーションをする際、ほとんどの人が「なるべく新しい物件を購入し、新築のように見せたい」そう考える。だけども、新たな価値観として松山氏が提案するのは〝リノベーションをゴールとして捉えるのではなく、人生をより豊かに充実させる手段として考える〟ということ。「ぼくたちの仕事は、施主様のご要望にお応えするということはもちろん、こういう古民家を後世に残していくということも、重要なミッションだと考えているんです。例えば、広い古民家を購入した時に、半分を民泊として活用してみてはどうでしょうか？日本各地にはたくさんの素晴らしい古民家が存在します。それを自分たちだけのものにしておくのはもったいない。だったら、建物を私物化せず、開けた場所にするというのもひとつの手だと思うんです」。

〝田舎暮らし〟や〝副業〟など、これまでとは違う様々なキーワードが飛び交うようになった昨今。これからの暮らし、人生を、リノベーションからスタートさせてみてはどうでしょうか。

HOTEL CULTIA 太宰府

福岡県太宰府市宰府3丁目3-33
0120-210-289（VMG総合窓口）
https://www.cultia-dazaifu.com/



[右]分厚い蔵の扉の中に、新しい扉を設置。[左]昔ながらの急な階段。登るのが少々大変だが、昔ながらの暮らしを体感するにはうってつけ